

キリマンジャロの農家経済経営と コーヒーの役割: 価格変動と農村発展

京都大学農学研究科 准教授

辻村 英之

Hideyuki Tsujimura

1. 本論の分析課題

農家は家計(消費経済)の基礎単位であり、同時に農業経営(所得経済)の基礎単位でもある。消費と生産をともに行う生活経済の基礎単位であるともいえよう。

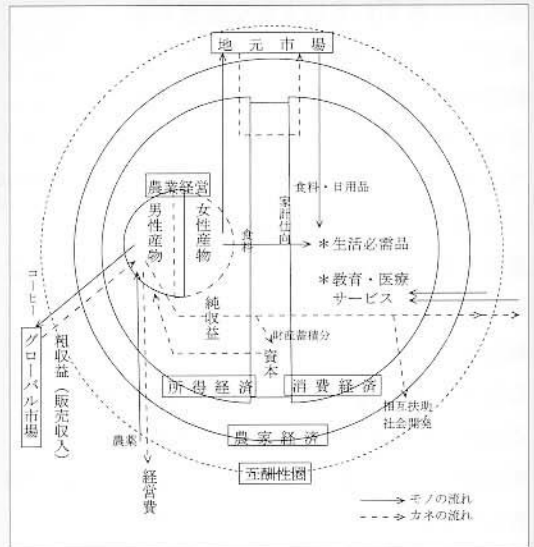
この両者が混在する農家経済を、家計と経営に理念的に分離した上で、それぞれの経済的な仕組み、両者間の経済的な関係の把握に努めてきたのが、京大式の農業経営経済学である¹。

著者はその農家経済経営の基礎概念や、それに沿って作成された農家経済簿を参考にして、タンザニア北部・キリマンジャロ山の西斜面(標高約1,500~1,700メートル)にあるルカニ村(人口1,482名、世帯数355戸のチャガ人の1農村)において、農家経済経営調査(参与観察、聞き取り調査、現金現物日記帳の記帳)を行った。本論ではまず、その分析結果の要点を整理するかたちで、ルカニ村における平均的な農家経済経営の構造を明示する。

次に、主にコーヒー業界での聞き取り調査をもとに、コーヒーの価格形成の仕組みを明示する。最後に、農家経済経営の構造と価格形成の仕組みを照らし合わせることで、これまで何度も世界中で社会問題とされてきた、コーヒーの激しすぎる価格変動が²、「キリマンジャロ」コーヒーの小規模生産者の経営・家計・生活に与える影響について解明する。さらには、キリマンジャロ山中における望ましい農村発展のあり方についても議論する。

2. ルカニ村における 農家経済経営の構造

図1 ルカニ村における農家経済経営構造の概念図



(1) 2つの経営目標:

「男性産物」と「女性産物」の経営部門

ルカニ村民は一般的に、山中にある家屋を取り巻く家庭畑と、山麓にある草原を開墾した「下の畑」の2つの畑を持つ。従来より、家庭畑ではコーヒー、バナナ、芋類、果物類などの栽培と、牛、羊、やぎ、ニワトリなどの飼養がなされ、「下の畑」ではトウモロコシ、豆類、ヒマワリなどの栽培が営まれてきた。



「下の畑」



家庭畑

これらの多様な農畜産物は、「男性産物」と「女性産物」の大きく2つに区分される。コーヒー、トウモロコシ、牛、羊、やぎは「男性産物」、バナナ、豆類、芋類、果物類、ニワトリ、さらには牛とやぎの乳は「女性産物」である。

両者を分かちつのは、特に経営目標と販売代金の支出費目（家計との経済関係）の違いである。それらが明らかに異質であるため、1つの農業経営体が、経営管理・行動を異にする2つの経営部門に分割されていると理念的にとらえたい。（図1）



バナナを日陰樹としたコーヒー生産（後方はキリマンジャロ山）

(2)「女性産物」部門の経営目標と家計との経済関係

1)「女性産物」と家計安全保障

女性が主体的に販売できる「女性産物」は、自家消費（農産物家計仕向）と少額の現金収入のための農畜産物である。その販売代金は、自家生産できない農畜産物や日用品の購入のために、すなわち生活必需品費として支出される。

そのため下記のように、本部門における経営行動については、年間を通して、生活必需品をいかに確保するかに重点が置かれる。つまり最低限の家計水準を維持する家計安全保障が、「女性産物」

部門の経営目標となっている。

2)バナナ・牛乳の財布機能

近年、牛の品種改良が進み、搾乳率が大きく高まった。また分娩期が異なる2頭の雌牛の飼養により、年間を通じた搾乳が可能になっている³。さらにチャガ人の主食であるバナナの木（正確には多年草）は、家庭畑に数え切れないほど植わっており、しかも栄養繁殖する。つまり親株の根本（根茎）から、子株が自然に生え出て育つ。これらは基本的に自家消費用であるが、最近は販売量が増えている。

バナナ・牛乳の販売先は、徒歩で約1時間半のところにある、地元の青空市場である。そこでは販



地元の青空市場でのバナナ販売

売収入の確保より、その現金で食料や日用品を買い物の方が重要である。市場へ持参するバナナ・牛乳の量は、その日に予定する買い物の額から逆算して決める。出荷できるバナナがない時には市場に行けないという。

このようにバナナ、次いで牛乳は、女性の「財布」の役割、つまり生活必需品の買い物の際に常に持参する、小額現金の「入れ物」の機能を果たしている。

3) 食料保障機能と家計安全保障

バナナと牛乳は1年中、消費が可能である。とはいえ主食のバナナは、乾季の7月半ば～10月半ばに収穫量が減る（干ばつ時に絶対的に不足することもある）。ところがその時期は、準主食であるトウモロコシの収穫期（7～9月）と重なっている。トウモロコシと豆類はドラム缶などで保管され、やはり年間を通じた消費が可能になっている⁴。芋類については、8～9月が食べ頃だが、畑に埋めておいて、1～3月の食料不足時に消費されることも多い。卵も毎日、確保できる。

このように「女性産物」を主体として、年間を通して食料を十分確保する工夫がなされている。この食料保障機能、さらには相互扶助システムの相乗

作用により、家計安全保障が実現している。

4) 互酬性圏にある販売先

上記のバナナ・牛乳の販売先である地元の青空市場は、互酬性圏内にあり、そこでの取引には相互扶助の価値観が残存している。高く吹っかけて利益を追求することはあまりせず、親しい者には販売物をおまけしたり、困窮している者には安めに売ることもある。そのためこの地

域で最低水準の、比較的安定した価格の市場が実現している⁵。

「女性産物」は利益最大化でなく、家計安全保障を追求するものである。互酬性圏内への販売により、市場価格の不安定さから家計を切り離すことが望ましい。

(3) 「男性産物」部門の経営目標と家計との経済関係

1) 「男性産物」と開発・利益追求

コーヒーやトウモロコシをはじめとする「男性産物」の販売は、多額の現金収入につながる。そしてその販売代金は、次年度の農業経営費（純収益→資本→農業経営）と家屋建設費（純収益→財産）に加え、家計費の中の教育・医療費（純収益→教育・医療サービス）として支出される。

それらから医療費を除いた費用を、村民は「進歩・開発」のための支出だととらえており、そのため「男性産物」を、開発や利益の追求のための農畜産物だと位置づけている。さらにそれらを差し引いても現金残高がある場合、拡大家族の間の相互扶助システムや、村・教会が主導する社会開発プロジェクトが支出先となる。

2) コーヒーの販売先：グローバル市場への従属

トウモロコシはバナナに次ぐチャガ人の主食であり、近年まで「女性産物」であったため、現在でも家計安全保障を志向する特性を残している。しかし特に豊作の時は、高価格での販売を追求し、互酬性圏外にある街の市場へ出荷している。

その一方で、従来から最大の現金収入源であり続けているコーヒーについては、自家消費はまれで、しかもほとんどが輸出用である。そのためコーヒー部門は、家計安全保障や互酬性を重視する価値観に強く制約されず、利益の最大化が追求される。

村民によるコーヒーの出荷先は、自らが組織する協同組合か、多国籍企業との関係が深い民間流通業者である。その後、競売所で輸出業者（多国籍企業）に販売された後、先進消費国へ輸出される。

このコーヒーの販売先であるグローバル市場は、WTO体制の下で、市場メカニズムを尊重する価値観に染まっている。同市場におけるコーヒーの価格形成の仕組みや価格変動が激しくなる理由については、次節で説明する。

(4)「男性産物」部門と「女性産物」部門の補完関係

1) 5層構造の農林複合経営

以上のように、ルカニ村においては農業経営体が、開発・利益追求を経営目標とする「男性産物」部門と、家計安全保障を経営目標とする「女性産物」部門に、明確に2区分されている。しかし家庭畑におけるそれぞれの生産方法に目を向けると、両産物の補完関係（図1の両部門が重なる部分）が浮かび上がってくる。

直射日光を嫌うコーヒーの木に対して、日陰を与えているのは、疎林を構成する高木・中木、果樹、バナナの木である。その中で、キリマンジャロ山中に昔から自生する豆科の高木「ムルカ」は、畑の地力維持・水分保持に強く貢献すると理解されており、どの畑にも数本を確認できる。さらにコーヒーの木の根元には、芋類と豆類が混作されている。

このようにルカニ村民は、家庭畑の面積（横の空間）が限られていることもあって、縦の空間を①疎林（高木・中木）、②果樹、③バナナ、④コーヒー、⑤芋類・豆類、の5層の構造とし、効率的に利用している。

2) 農林畜複合経営と環境保全

この農林複合経営には、畜産が相互補完的に組み合わされている。家畜のふんは堆肥化され、バナナやコーヒーの木の根元に施肥される。さらにバナナの葉や牧草などが、家畜の飼料とされ、ここに複数の産物が強い補完関係を持つ、農林畜複合経営のシステムが完成する。

以上の説明から、「男性産物」であるコーヒーの木に対して、「女性産物」であるバナナや果樹、そして疎林や堆肥（家畜のふん）などが養分や水分を提供するという補完関係を確認できる。これらが地方の消耗を補うことで、高価な化学肥料を利用しない、低費用でのコーヒー生産が可能になっている。

このようにルカニ村におけるコーヒー生産は、大農園における近代的生産のように森林を完全に開墾するのではなく、それを疎林として残し、その高木・中木を日陰樹（シェイド・ツリー）として活用している。環境保全的な生産方法として注目されている、「アグロフォレストリー」に近い。

(5) 農家経済経営構造とコーヒーの価格変動

以上のようにルカニ村における農家経済経営の構造を把握できれば、コーヒーの価格変動が村民の経営・家計・生活に与える影響を、分析することが容易になる。

コーヒーの国際価格（先物価格）の下落と、生産者価格の下落は連動するが⁶、その結果、まずは農業経営、そして社会開発や拡大家族間での相互扶助が難しくなる。次に教育・医療費を捻出できなくなるが、村民はコーヒー販売の最大の役割を、教育経費の確保と考えており、彼らのコーヒー生産の意

図2 コーヒーの国際価格（ニューヨーク先物価格）の変動図

セント/ポンド(=453.6グラム)



注)東京穀物商品取引所やVolcafe/ED & F MAN社などが作成した図を参照して、筆者が作成。

欲が大きく減退することになる。

それでも「女性産物」によって、最低限の家計水準が下支えされることは重要である。しかしコーヒー生産を断念した場合、同時に日陰樹が伐採され、「女性産物」バナナの木の数が減少したり、森林が破壊される可能性がある。

その一方で、国際価格の上昇やフェアトレードの結果、コーヒーの生産価格が上昇すれば、村民の経営・家計・生活について、上記の逆の影響が生じるのである。

3. コーヒーの価格形成の仕組み： 価格変動の要因

(1) コーヒーの南北問題と価格形成

植民地支配の下で、多くの途上国が否応なしに、コーヒー生豆の安価な供給地とされ、そのおかげで先進国における安いコーヒー飲用が可能になった。コーヒーが南北問題を象徴する商品だといわれるゆえんである。

このような先進国に有利な国際経済秩序に対して、途上国政府が異議申し立てを行い、その公正化を求めたのが南北問題運動であった。コーヒー

については、1962年に国際コーヒー協定が締結され、価格が安定帯（第4次協定（1983～89年）においては120～140セント/ポンド）を下回らないよう、加盟生産国に対して輸出量の制限を課す、輸出割当制度がそなえられた。

しかし同制度は、南北問題運動の衰退、GATT体制の強化（WTO体制の確立）による農産物価格支持政策の嫌悪、などが原因となって、1989年に停止した。

下支えの仕組みを失ったコーヒー価格は、その後から低迷傾向に陥った。特に2001～02年にかけて、ブラジルの豊作とそれにもなうニューヨーク取引所からの投機家流出を主因とし、国際価格は「史上最安値」の水準にまで落ち込んだ（最低時には41.5セントまで降下・図2）。「世界の2,500万人のコーヒー生産者が貧困にあえぐコーヒー危機」として、世界中で大きく報道されたのである。

(2) 貿易価格形成の仕組み：

基準価格としてのニューヨーク先物価格

コーヒー生豆（主にレギュラー・コーヒーに利用されるアラビカ種で、「ブルーマウンテン」などの希少価値が著しい銘柄を除く）の貿易価格は、〔ニュー

ヨークのコーヒー先物市場で決まる価格（本論ではニューヨーク先物価格と略称する。コーヒー業界においてはこれを国際相場、国際価格と呼ぶ）を基準・指標とし、当該豆の品質や供給量、そして輸出入業者間の力関係に沿って割増・割引する」という公式に沿って決まる。

そのコーヒーの基準価格・指標価格となる、ニューヨーク先物価格の最重要な変動要因として、ブラジル（世界の輸出量の約3割を占める）における「①産地の天候」→ブラジルの「②生産・輸出量」というファンダメンタルな（需給関係に関連する）要因と、それに反応する「③投機家の動向」という非ファンダメンタルな要因を挙げることができる。短期的変動の場合は、「①ブラジルの天候→②生産・輸出量」より「③投機家の動向」の要因の方が優勢となり、中長期の場合は「①→②」の要因の方が優勢となる。

短期の場合はもちろん、「投機家の動向」によって、ブラジル産豆供給量では説明できない複雑な動きが生じてしまう。ファンダメンタル要因が優勢となる中長期の場合であっても、同豆の供給量に沿った変動を「投機家の動向」が激化してしまうことがある（実際の供給量で理解できる以上の暴騰・暴落）。

先物価格の暴騰・暴落はそのまま貿易価格の乱高下となり、生産者サイドも消費者サイドも激しい価格変動に悩まされる。

(3)「投機家の動向」と 価格の異常・過剰変動

この「投機家の動向」が、異常・過剰な価格変動を導いてしまう構造を、オルレアンは「コンヴァンション（共有信念）」（集団に共通の参照基準）の概念で説明している。

全員に承認された確固たる「共有信念」を市場参加者たちが維持している限りは、彼らの行動はその客観的な（集団外にある）参照基準に方向づけられるため、取引は連続的、安定的になる。価格

変動も正常に（たとえばファンダメンタルな要因に沿って）、安定的に推移する。

しかし「共有信念」に対する懐疑心が生じると、一部の市場参加者が自信を失い、他の参加者の意見・行動についての予測をもとに戦略的に行動しはじめる。異常・過剰な価格変動が導かれてしまうのである。さらに「共有信念」が崩壊すると、参加者たちは不安にかられ、その戦略的行動が一般化する。すべての参加者が、彼らの平均意見・行動についての高次元の予測をもとに行動するようになる。その結果、不確実で自己（集団内）言及的な行動となり、天上・底値もみえないままで、急激な価格暴騰・暴落の危機が生じるのだという⁷。

ニューヨークのコーヒー先物市場においては、「①ブラジルの天候→②生産・輸出量」による価格変動が、投機家たちの「共有信念」になっている。もっと具体的にいえば、「ブラジルにおける生産量が平均的であれば、世界全体のコーヒー供給量は過剰であり、価格は低迷する」という「共有信念」を持っている。そのため、ブラジルの天候が正常であれば、投機家たちは低価格で安定するだろうコーヒー先物には目もくれず、価格変動の大きい商品や金融の市場を飛び回って、価格差益を追求する。

しかしブラジルにおける降霜や干ばつの可能性が生じると、投機家たちが先物市場に参加しはじめ、異常・過剰な価格変動がはじまる。さらに天候異常が現実になると、実際の生産減・価格上昇の程度について予測できずに不安に駆られ、ヘッジファンドをはじめとする巨大投機家の背中を追いかけるかたちで、莫大な数の投機家がコーヒーの先物取引に参入する。価格が急騰するのである。

(4)当該豆供給実勢と投機家の影響

強い投機性の下では（特に「共有信念」弱体化の局面において）、世界全体の需給実勢はもちろん、ブラジル産豆の供給実勢についても、それらを正確に反映するニューヨーク先物価格の実現は、奇跡に近い。偶然、それが実現していたとしても、

ブラジル以外の国で生産されたコーヒー豆の供給実勢は、その先物価格、ひいては当該豆の貿易価格の水準に影響を及ぼさない。「キリマンジャロ」や「モカ」のように、日本では十分に差別化されているが、供給実勢が貿易価格に影響を及ぼさない状況は同じである。

ただ当該豆の供給実勢は、割増・割引の部分に反映する。しかしその額は、多くても貿易価格の1割を占めるに過ぎず、全体の水準を動かす力にはならない。同じ理由で、多国籍企業の高い市場シェアや強い取引力も、貿易価格の統制力にはつながらない。コーヒーの場合は、流通・貿易業者よりも投機家の方が、価格水準に大きな影響を及ぼすのである。

結局、世界の輸出量の1%にも達していないタンザニア産豆の生産者が、十分な利益を得るためには、約3割の輸出量を誇るブラジルにおける、降霜や干ばつによる凶作を待ち望むしかない。

(5) 2000年代後半の価格上昇とその要因

ところが「コーヒー危機」を経て、価格変動の様相やその変動要因が異質になったようにみえる。2004年末からコーヒーの国際価格（先物価格）が上昇し、5年間、100～150セント/ポンドの高めの水準で安定的に推移（ただし2008年には、169.6セントまで上昇）した後、2010年半ばから再び上昇し、2011年5月には300セントを超える高騰となった。コーヒー危機時の7倍以上に跳ね上がったことになる。

「コーヒー危機」によって、タンザニアのキリマンジャロ山中のような、生産性は低いが高品質なコーヒーを生産できる産地において、コーヒー栽培を断念する生産者が増えたことも、その1要因であろう。またブラジルに次ぐ第2位の生産国コロンビア（同じく高品質コーヒーの生産国）の減産も要因の1つである。

しかし最大の要因は、需給関係におけるブラジルの位置の変化だと考える。従来は価格上昇にともないブラジルで増産が進み、2年後には下落するという「コーヒーサイクル」が続いてきた。しかし

ブラジルにおける経済発展やバイオ燃料用農産物などの普及により、コーヒー以外に利益を得られる産業や農産物が増え、価格が上昇しても慌ててコーヒーを増産する必要がなくなった。

またブラジル国内のコーヒー消費量、しかも上質な輸出規格品の消費が急増していることも重要である。ブラジルのコーヒー生産量が増加しても、それがそのまま輸出量の増加につながらない構造ができあがりつつある。

以上のように、「①ブラジルの天候→②生産・輸出量」の変動要因が弱まっている。そして同国自身や、中国、ロシアなどの新興消費国の台頭で、需要量の増加が国際価格を動かす新しい局面が生じているようだ。

その一方で「投機家の動向」は、より強い価格変動要因になっている。2010～11年の価格高騰については、世界的な金融緩和でふくらんだ投機資金が先物市場に流れ込み、ブラジルでの増産にもかかわらず、異常な高価格を導いてしまった。2008年と10～11年の価格高騰はともに、原油、トウモロコシ、小麦などの一次産品の価格高騰と連動しているが、コーヒーを含むそれら一次産品に分散投資するインデックスファンド（CRB指数などの一次産品価格の代表的インデックスに採用されている複数の商品に投資し、指数の値動きに連動する運用をめざす投資信託など）の成長が、その理由であるようだ。

すなわち投機家たちは、ブラジルの生産量でなく、新興消費国の消費量、原油をはじめとする一次産品の価格変動に注目するようになってきている。これまでの供給量のみでなく需要量による変動、そして他の一次産品価格との連動が、投機家によるコーヒー先物取引の「共有信念」になりつつある。

4. コーヒー危機の影響

(1) 農業経営費への影響：経済面の危機

コーヒー危機にともなうコーヒー販売収入の激

減は、ルカニ村においては、まず次年度の農業経営費に影響を及ぼす。しかし上記のように、高価な化学肥料を利用しない低費用でのコーヒー生産が可能になっており、経営費のほとんどは農薬費である。それを削って経営費をゼロに等しくし、何とかコーヒー生産を持続させている村民も少なくない。

しかし病虫害が流行し、収穫量と品質が大きく低下している。生産意欲も減退し、他産物（特にトウモロコシ）の生産や、街への出稼ぎに力を入れる村民が増えている。

しかしながら、コーヒーを超える魅力的な換金作物は容易にはみつからず、また街におけるフォーマル部門での雇用は困難である。

(2) 農林畜複合経営の危機： 環境保全面の危機

その結果、森林破壊が進展してしまった。

街での雇用に恵まれない一部の若者が、現金の必要性に駆られ、家庭畑にとって大切な「ムルカ」を含む高・中木を積極的に伐採し、街の材木店に販売するようになった。

また下記の家庭畑へのトウモロコシの侵出についても、家庭畑全体をトウモロコシ用にしてしまう事例が目立つようになった。その場合、コーヒーだけでなく、樹木やバナナまでも伐採し、直射日光をトウモロコシに当てるのが優先される。やはり森林破壊が促されてしまうのである。

農林畜複合経営の持続が危うくなっている。複数の産物の補完関係が崩れつつあり、地力の大幅な減退が危惧される。



トウモロコシ畑化と森林破壊（後方はコーヒー畑）

(3) 教育・医療費への影響： 教育・保健面の危機

子供たちは、進学への断念や休学を余儀なくされた。また保健衛生面についても、村唯一の診療所における診察をできる限り避けたり、診察を受けても支払いができない状況になった。出稼ぎが進んでさらに利用者が減り、診療所は閉鎖に追い込まれてしまった。

(4) 食料保障機能への影響： 家計安全保障面の危機

「男性産物」コーヒーの販売収入の激減は、それに次ぐ「男性産物」トウモロコシのみならず、「女性産物」にも影響を与えはじめている。

トウモロコシは近年まで、「女性産物」とされてきた。また現在も、基本的には自家消費用のままである。しかし今や、収量の高いハイブリッド種の利用、化学肥料の投入、余剰の販売が進展し、換金作物の性格も帯びるようになった。「男性産物」とみなされるようになったゆえんである。

さらに「下の畑」でのみ生産されていたトウモロコシが、上の家庭畑へ侵出してきた。利益を得られ



目新しいコーヒー・バナナ・トウモロコシの混作

ないコーヒーの老木を伐採し、その跡地にトウモロコシが植えつけられている。その場合、上記のようにコーヒーの日陰樹であるバナナも伐採されてしまう。

このようなコーヒーの販売収入減を補うための努力が、バナナと牛乳をはじめとする「女性産物」において過剰に進むと、食料保障機能が弱体化してしまう危険がある。

実際、バナナについては、特に価格上昇時になると、3～4グループの仲買人が入れ替わり村に現れ、ほぼ毎日、軽トラックの荷台いっぱいバナナを村から持ち出してしまう。そして村民はその販売代金を、薬代などの医療費の一部に充てはじめている。

自家消費用のバナナはしっかり確保されているというが、今の勢いで仲買人の購入が進み、そして上記のようにコーヒーの日陰樹としてのバナナが減り、かつ干ばつが生じた場合、これまで経験したことがない、主食バナナの不足が懸念される。

5. むすび：価格高騰の影響と望ましい農村発展のあり方

(1) 価格高騰の影響：投機家が決める キリマンジャロ住民の教育・保健水準

その後の国際価格の高騰、そしてルカニ村においては、フェアトレード・プロジェクトによる生産者価格引き上げの試みもあり⁸、急速に生産意欲が回復している。しかし「コーヒー危機」で、コーヒーの木の数や収穫量が半減してしまった（70年代の最盛期に比べると10分の1以下）。せっかくの高い生産者価格も、高い販売収入につながらず、村民たちは大慌てでコーヒーの苗木を植えはじめている。

その日陰樹として、バナナの苗木も同時に植えられている（樹木の増加は確認できない）。

しかし干ばつの影響もあって、なかなか「コーヒー危機」以前の収穫量に戻らず、出稼ぎで村を離れた若者たちが、惹きつけられるに至っていない。またトウモロコシ価格も上昇しているため、その生産を大幅に減らすことはなく、バナナ、トウモロコシ、コーヒー苗木が入り交じって栽培される、目新しい家庭畑の景観が生じつつある。

以上のように、農家経済経営の構造とコーヒーの価格形成の仕組みを解明したことで、「風が吹けば桶屋が儲かる」のごとく、「投機家の動向」が、キリマンジャロ山中における、コーヒーの持続的生産、森林保全、住民の教育・保健水準に、決定的な影響を及ぼすことがわかった。そして「投機家の動向」を方向づけるのは、従来から「ブラジルの天候→生産・輸出量」であり続けたが、近年は新興消費国の消費量、原油をはじめとする一次産品の価格変動も、投機家を動かすようになってきている。

いずれにせよ、それら農家経済経営の成果を左右する決定的な要因は、小規模生産者・経営者が全く統制できないものである。キリマンジャロ住民の教育・保健水準は運任せということになるが（ルカニ村においては、フェアトレードがその水準を下

支えしようとしている)、それだからこそ、彼らが統制できる、「女性産物」による最低限の生活(特に食料消費)水準の下支え機能を、より重視することができるのである。

(2) 望ましい農村発展のあり方： 換金作物と自給作物のバランス

3年前に横浜で開催された第4回アフリカ開発会議において、農業の開発・援助をめぐる「経済成長の加速化」の課題の下に位置づけられたこともあり、食料増産・農業生産性向上・農業競争力強化の議論が中心になった。そのためアジアにおける緑の革命の成功例(高収量品種の普及による生産性の引き上げ)を、アフリカに適用すべきことが強調された。またタンザニアにおいては、「農業部門開発戦略」「農業部門開発プログラム」によって、生業農業の商業化が重視されている。

しかしながら本論で明らかになったように、キリマンジャロの農家経済経営においては、利益追求

と並んで、食料消費・家計の安全保障が重視されている。後者は同会議において、「経済成長の加速化」とともに重点事項とされた、「人間の安全保障」にとって重要である。そしてそれらの安全保障は、農業の多様性(多様な産物・品種の混作、複合経営)によって支えられている。

高収量品種や換金作物が重視されすぎて、その単作化が進んでしまうと、キリマンジャロ山中で確認できたような、タンザニアの小農民が持つすぐれた家計安全保障制度が破壊されかねない。

さて以上のように、「男性産物」と「女性産物」を明確に区分にすることが、キリマンジャロの農家経済経営の特質である。利益を追求する「男性産物」(主に換金用)に特化することなく、家計安全保障を追求する「女性産物」(主に自給用)とのバランスを重視し、自らが統制できない経営環境・社会経済の変動に応じて、そのバランスを調整していくことが、望ましい農村発展のあり方であると考える。

注)

- 1 詳しくは、大槻正男著作集刊行委員会編「大槻正男著作集 第1巻 農業経営論I」楽遊書房、1977年、菊池泰次「農業会計学」明文書房、1986年、辻村英之「タンザニア農村における貧困問題と農家経済経営—コーヒーのフェアトレードの役割—」野田公夫編『生物資源問題と世界』京都大学学術出版会、2007年、67～98ページ、等を参照されたい。
- 2 詳しくは、ニーナ・ラティンジャー／グレゴリー・ディカム(辻村英之監訳)『コーヒー学のすすめ—豆の栽培からカップ1杯まで—』世界思想社、2008年、等を参照されたい。
- 3 詳しくは、辻村英之「キリマンジャロにおける牛の飼養・販売の特質—農家経済経営リスクと家計安全保障—」『生物資源経済研究』第16号、2011年、95-113ページ、を参照されたい。
- 4 詳しくは、辻村英之「キリマンジャロにおけるトウモロコシ・豆の生産・販売の特質—コーヒー危機にともなう商品作物の多様化と家計安全保障—」『生物資源経済研究』第12号、2007、73～86ページ、を参照されたい。
- 5 詳しくは、辻村英之「キリマンジャロの社会経済構造と地域経済圏」『生物資源経済研究』第13号、2008、51～67ページ、を参照されたい。
- 6 多国籍企業による買い叩きとそれに対抗できる農協の弱体化が原因であるが、それは生産から消費までの取引の詳細を解明するフードシステム分析の結果、明らかになったことである。下記の価格形成の仕組みの詳細についても、詳しくは、辻村英之「おいしいコーヒーの経済論—「キリマンジャロ」の苦い現実—」太田出版、2009年、辻村英之「コーヒーと南北問題—「キリマンジャロ」のフードシステム—」日本経済評論社、2004年、を参照されたい。
- 7 詳しくは、アンドレ・オルレアン(坂口明義・清水和巳訳)『金融の権力』藤原書店、2001年、を参照されたい。
- 8 詳しくは、辻村英之『おいしいコーヒーの経済論—』を参照されたい。